

教育をわたしたちの手に取りもどそう

共同研究者 尾形正宏

無着成恭^{*1} 著『無着成恭の昭和 교육論』(太郎次郎社, 1989年)を読む

本書は、ある民間教育研究団体主催の会合のうちに、金沢の退職された女先生に頂いた大量の蔵書の中の1冊です。今年、本校の朝読の時間に読んできました。

今時の教育界になくなりつつある「教師としての自立した視点」が書かれていると思うので、紹介します。

■子どもたちが自分たちの生活のまずしさ、みじめさのほんとうの原因をしるために、そして、そのまずしさ、みじめさをとりのぞくためにどうしたらよいのかという方法をしるために、人間の歴史を、人間の社会・経済構造をちゃんと科学としてまなぶ必要があるのであって、生活経験をいくらひねくりまわしても、どうにかなるわけではないのです。／学校の出発点に子どもの生活をすえることはたいせつであるとしても、問題をときあかすためには、ながいながい系統的な、理論的な学習が必要です。

(148p, 「山びこ学校」から脱出の転機)

この文章は、『続・山びこ学校』(1970年)の「あとがき」を本書へ再掲したものです。無着は、ここで、あの有名な実践「山びこ学校」^{*2}との決別宣言をしています。

無着は、自分には「系統学習」という視点が欠けていたことに気づき、「ほんとうに勉強しなければならぬと思いはじめ」たのでした。

■端的に言えば、知識(知恵)が意志を決定していく引きがねになるということである。知らなければ、ついには敗退することが多い。どんな困難でも乗り越えていくためには、自分自身を客観的に見ることができる洞察力がなくてははいけないし、自分が何をやろうとするのか、何をやっているのか、それは、どんな意味をもっているのか—そういうことが判断できる(あるいは展望できる)知識がなくてははいけない。知識をベースとした知恵、そして、洞察力がなければ追従する以外にないし、自分の身のふり方を決定することができないと、道元禅師はおっしゃっているのだ。

(159p, 正師を得ずんば学ばざるに如かず)

27歳の無着は、駒澤大学の3年生に編入学して、もういちど学問をし直します。そのとき無着は「啄木は27歳で死んでいる。私は27歳からはじまる」と思っていた

*1 無着成恭(むちゃくせいきょう)…1927～。禅宗のお寺の長男として山形県で生まれる。

*2 『山びこ学校』…1957年、山形県山元村中学校生徒の生活記録を『山びこ学校』(青銅社、現在は岩波文庫、角川文庫)として刊行。

と回顧しています。駒澤大では、門前の総持寺祖院から来た宮川哲州という友に大いに影響を受けたようです。幼い頃、父親から聞かされていた道元禅師の教えも、そのとき新たに学び直したといえます。

その後（1956年）、無着は明星学園^{*1}に勤めます。無着は、当時の「勤務評定反対闘争^{*2}」に関して、「教師の加害性」に触れ、次のように述べています。ちょっと長いですが、引用します。

■教師の小官僚気質や下士官的横柄さのよってきたる根元は、「自分で判断することが許されない」というところにあるのではないかとするならば、(1)何を教えるか(教育すべき内容)も(2)どのように教えるか(教育方法・学習形態)も(3)どこまで教えるか(基礎学力をどうとらえるか)も、教師自身で判断するほかはなくなる。／教師「私たちが国家権力の被害者だったのです。仲よくしてください」／親「あなたたちは、加害者だ」／教師「そんなことはありません。おなじ被害者です」／これではだめなのだ。これではいつまでも命令され、やらされる存在でしかない。国家権力の末端の手足としての加害者でしかない。それを指摘されて泣き言をいっているうちは、日本の教育はよくなるまい。教師自身がほんとうの意味での「加害者」としての名誉ある地位を獲得するためには、(1)何を教えるか、(2)どのように教えるか、(3)どこまで教えるか、の三つの条件を自分自身で決定し、確立し、授業の中で実現していくほかはない。

（197p, 授業公開と公開研究会へ）

上からいわれたことを、文句を言いながらもそのまま子どもに下ろしていくだけの教師が、子どもたちや保護者から見て、被害者であるわけがないではないですか。「オレは被害者だ」と思っているのは、教師だけなのです。

それならば、いっそのこと、「確信的な加害者となればどうか」と無着は言っているのです。自分の教育には、自分で責任をとる教師。それこそ、真剣に子どもと向き合わざるを得ません。それは同時に、教育行政との軋轢を生むことも覚悟する必要があるでしょう。たいへんだけれども、教師が自立して生きていくためには、これが唯一の道ではないでしょうか。

以前「妻が妻が…」「秘書が秘書が…」と自分の責任を横に置いておいて、責任逃れをしていた官僚がいましたが、「文科省が文科省が…」といいながら、学習指導要領に縛られた教育内容や学力向上政策を垂れ流している教師も、似たり寄ったりではないかと思うのです。

しかし、教師一人一人が自分で（1）～（3）までのことをやれるわけではありま

*1 明星学園(みょうじょうがくえん)… 1924年創立。大正自由教育運動の流れの中で誕生。『こぼんご』という国語教材も有名。

*2 勤務評定反対闘争… 1956年、愛媛県教育委員会が教員に勤務評定を実施し、翌年文部省がこの全国実施を決めたことに対して、日本教職員組合を中心に全国的に展開された反対闘争。

せん。そこで、無着は言います。

■そのことがほんとうに実現できる条件ができたのは、一九五〇年代の後半から六〇年代にかけて、数学教育協議会(数教協)の遠山啓^{*1}先生たちが、算数・数学教育の中で水道方式や量の理論をはじめとする一貫カリキュラムを民間側から創りだしていったことによるのだ。それは、算数・数学教育ばかりではなく、理科教育の分野では科学教育協議会(科教協)の研究成果などをはじめ、それぞれの教科の分野で民間教育研究団体が、何をどのように教えるか、という成果を生み出すことによって、はじめて可能になっていったのだ。それは、民間の学者・研究者と、現場の教師たちとの共同研究ですすめられた民間教育運動によってであった。(同上)

教師が自分の力で立とうと思えば、それが可能になる<地盤>はすでにできているのです。あれからすでに半世紀が過ぎています。1963年に提唱された仮説実験授業も、今年50周年を迎えました。

無着がいうように、民間教育研究団体には、「教師が自立できる研究成果」がたくさんあります。

たとえば、理科分野でいうと、明星学園・理科部からは『自然科学の教育』(麥書房、1968年)という800ページ以上もある大部な著作が出版されています。また、科教協からは、1958年からの月刊誌『理科教室』を集大成した『理科教室復刻版DVD』(600号まで)が出ていて、以前の実践記録をパソコンで閲覧することが可能になっています。さらに、仮説実験授業なら、それこそ<授業書>という形で出版(仮説社)されています。

しかし、最近の現場を見ると、われわれの教育研究集会でさえ、「いかに教科書を教えるか」ということのみを追求しているような気がしてなりません。

今一度、<教師として子どもと向き合うときに、何を一番大切にしなければならぬのか>を考えてみたいと思います。それは、<学力調査の過去問をくり返すこと>でもないし、<つまらない授業でも文句を言わない子どもをつくること>でもないはずです。

■国家というものは、政治の論理で教育を発想し、国家に従順な人間を育てることに、国家としての教育の目的がある。だから、国家の教育目標はつねに政治の手段として設定される。つまり、「学校」とは「国家」なのだ。

(250p、『山びこ学校』と『続・山びこ学校』とのちがい)

「期待される人間像」「知識基盤社会で生きる力を」「グローバル化に打ち勝つ人間を」など、その時代の要請に合わせて国から降りてくる教育政策。特に公立学校は、その存在そのものが「国家が必要とする人間を作ろうとする力学が強力に働いている」ことを忘れてはなりません。わたしたちは、子ども・保護者にとっては、常に「加害

*1 遠山啓(とおやまひらく)…1909年～1979年、熊本県生。日本の数学者。東京工業大学教授。数教協初代委員長。

者」として映るのです。

■これに対して、教育の論理による教材の編成は、子どもたちが、その教材に感動し、一人の人間として自分を自覚することができるかどうかにかかっている。それは教育それ自体が基本的人権に根ざしていることを意味する。教育とは、国家(あるいは自然)のワク内に組み込まれている一人の人間を、国家(あるいは自然)から一人の人間として独立させることである。一人の人間の内部に、人間の存在は国家より重いという意識をもたせるのは、並大抵のことではない。(同上)

■たとえば、S 先生の場合、科学的に体系化された教材をひじょうによく勉強して子どもにまねに立つのだが、子どもが興味を示さないと、「先生はこんなに一所懸命に勉強して教えようとしているのに、君たちはちっともまじめに聞かないではないか」と怒りだす…というような現象になってあらわれた。そしてついには、「教師の努力をちっとも理解しない〇〇と××を退学させてくれ」というようなことを言いだすようになった。／教えることも、一つの権力であったのだ。このようにして、「教育の科学化」運動は衰退に落ち込んでいく。(252p, 「教育の科学化」運動の衰退)

教育内容を「科学化」したからといって、それがそのまま、クラスの子どもたちに合うわけではありません。いくら教師が、寝る時間も惜しんで、善意で(子どものために)教材研究をして教育内容を「科学化」しようと、それだけでは、子どもにとっては「別の教科書ができただけ」です。だから、教育内容だけではなく授業展開のしかたをも科学化する研究が必要になります。子どもの認識にそった授業展開、授業プランが必要なんです。

あっちをむいている子どもは、わたしたちに<何か>を伝えてくれています。それがなんなのか…を、つかみたいものです。

うちのクラスの A くんは、わたしの教科書授業では、ほとんどのってきません。しかし「漢字マッキーノ^{*1}」は毎日しっかり書いて参加するし、仮説実験授業では真面目な意見を言ってくれます。先日の図工では、キミ子方式^{*2}で「空とススキ」を喜んで描きました。

2013/10/19 記(サークルに提出)

2013/10/26 追記(脚注を補足、一部追加)

*1 マッキーノ…ピンゴゲームの要領で、マスの中に漢字や英単語などを書き込み、ゲームをしながら習熟していく方法のこと。名古屋の牧野英一さんが中心になって開発されて、「マッキーノ」と呼ばれている。(『たのしい授業 2002年11月号』仮説社 p9)

*2 キミ子方式…松本キミ子氏が提唱した絵を描く方法。三原色と白だけで色を作り、描きはじめの一点を決め、その部分からとなり、となりへと描きすすめていく。画用紙が余れば切り、足りなければ足して、最後に構図を決めます。構図を決めてからリンククを描き、色をぬる今までの絵の描き方と、まったく逆。